

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
水遊足りてをさなの午睡かな	南よりモスラが来ます二重虹	湿りたる天地を抱く蝉時雨	曝涼や曾祖父の句に我のこと	カサブランカ香に酔はされ又も観て	字役のすててこ歩く昼餉時	里海の帰漁の船に夕凧げる	雨ひと夜たどる記憶や夏燕	引き波に沈んで浮いて羊草	睡蓮の葉に囲まれて花咲ける	厨入る前のひと梳き明け易し	帰省子の椅子一つ足す夕餉かな	古稀過ぎてー8きつぶや夏の空	孫の寝てかたへに送る団扇風	火鍋の前にはハンカチーフの染み	妖艶なつや持つそれは新米だ	紫陽花は少年の歌ソの響き	冷索麵出汁まで啜る角の店	雨蛙跳ぶや乳飲みの吾子が這う	この頃のかき氷かな持て余す

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	◆水明インターネット句会◆ 令和六年七月
亡き母の愛でし白百合咲き初むる	昂然と海にそばだつ雲の峰	凌霄花や百年前の母生家	戸口にて冷氣と暑気が渦を巻き	照りかへす日射し眩しや蝉の声	ありません2個目の俳句はありません	つひに吾男日傘の人となり	半夏生出さぬ文いる夫婦函	つひに吾男日傘の人となり	鷺草をこよなく愛でし妹遠く	白き道帰り麦茶を一気飲み	異邦人母も娘もサングラス	靴紐を結び炎暑の街中へ	花火消え運河に戻るネオンかな	世の性を背負つてででむし思案中	旧式の愛車の走りカブト虫	雨音にめざめ大輪百合の花	病葉や信のなからば国沈む	行行子止めさしたるあの台詞	初デート俯きかげんソーダ水	

140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	◆水明インターネット句会◆ 令和六年七月
涼しさや鍛冶屋が研ぎし妻の出刃	夏空へ拳を突かむ仁王像	アスファルトに時折震へ大揚羽	鎌倉の頼朝の墓草茂る	蜜豆や惚気話を聞いてやる	野良猫の黒より白の涼しかな	薔薇の前写真撮りあうメイド服	墓清掃延び延びにして秋涼し	限界の村に陽は差し枇杷熟るる	夏山にヤツホウ預け踏み出しぬ	友からの山の絵手紙風涼し	きのふまで生きゐし人や早星	梅干しを頼りに終える酷暑の膳	J Aの帽子の鍰を零るる夏の露	おほなるの迫りをるらし心太	炎天のロボやギクシヤク高速指示	薔薇の前写真撮りあうメイド服	ご飯よと母さんの声夕焼空	キャンプの火消えて星降る上高地	ピン札で払う丑の日初デート	

														146	145	144	143	142	141
														まつりごと海霧（じり）に隠れる派閥かな	早朝の駅のホームに火蛾を掃く	雲の峰先導される自転車に	駄菓子屋は子らの社交場夏休み	湯上がりの越中ひとつ冷し酒	日盛りや林に籠る牛の群れ

◆水明インターネット句会◆

令和六年七月